

団長の独り言

「ゴドーを待ちながら」

3月30日(土)に演劇基礎教室を開催したのは前回お伝えしたけれど、その時に用いたテキストが、サミュエル・ベケットの「ゴドーを待ちながら」。「ゴドーを待ちながら」は、1952年に描かれた作品で、二人のホームレスが大きな木の下で、わけの分からない会話をしながら「ゴドー」という人物を待っている。

「二人」以外にも他に二人と一人が、ちよろつと登場するけれど、こちらも会話が全然噛み合っていないくて、物語の進展も何もなくて、1幕も2幕も、ひたすら「ゴドー」ってものを待っているという「不条理劇」の代表作。

20代の頃から、名前くらいは知っていましたよ……一応ね。

「不条理劇を理解してこそ演劇だ！」みたいな事を言う、理屈っぽい演劇関係者の方々のささやきが、あちらこちらで聞こえて来ていたので、とりあえず知ったかぶりでもするか！って脚本をチラ見した事もあったけれど、なんでこんなモノを演劇人達は議論して、演じたがるのか？まるで理解出来なかったし、また理解する必要もないだろうと思っていた。

そんな私が何故に今回の演劇教室で「ゴドー」を？ってところなんだけれど、ここ数年、劇団での稽古と言えば、ずっと本公演の稽古に追われていたので、せつかく「演劇教室」を行う機会に恵まれたんだし、どうせならば、ぜえくたいに劇団ふあんハウスでは上演しないであろう作品を平野恒雄が演出したら、どんなものになるんだらうか？ってことに興味が湧き、「だったらゴドーでしょう」という事で、「ゴドーを待ちながら」を使ってみんなと共に実験をすることにした。

アマゾンで脚本を購入し、久々に読んでみたけれど……「だからなんやねん！」って突っ込みを入れたくなるセリフのやり取りばかりで、結局そのまま物語は終わってしまう……。わかっちゃいたけれど、なんだかモヤモヤが残った。

そこでネットを駆使して、とにかく「ゴドーを待ちながら」について描かれているモノを手当たり次第読み漁り、数々の動画も観て、なんとなく理解出来たような気がしてきたところで、参加者と共にやってみる事にしたはいけれど、「ゴドー」は読んだことも観た事もない人達ばかり。

正直、演劇を行う集団の長としては、一人くらい「私のバイブルです！」と目を輝かせてくれる人がいてもいいかな？くらい思ったけれど……まあでもそうだよなあ「ゴドー」をバイブルとしている人は劇団ふあんハウスで芝居をやるうなんて思わないもんね。

そんな事を想いながら、主人公のホームレス二人のところに、「少年」がやってくる場面を三人一組になって演じてもらう。

まずは読み合わせから。最初は皆さん首をかしげながら、とりあえず声を張り上げ、泣き、驚く芝居を演じていたが、どうもしくくりこない。

しかし、何度か繰り返していると、その噛み合わないセリフのやり取りが、滑稽に見えてきて、何故か「ドラマ性」を感じるようになり、その上、それぞれチームの個性が出ていて、同じテキストを使用しているにも関わらず、各チームが全然違った芝居を行っているかのようで、知らず知らずのうちに引き込まれていく。

そこで私ものつてきて、自分が持っている付焼刃の「ゴドー」の知識と解釈を用いて、ダメを出していくと、皆の芝居は益々いい感じ？になってきたので、

今度はその読み合わせに動きを付け、さらにピアノのアマテアズと、ヴァイオリンのカブちゃんに、「このセリフのあと、情緒的な曲！」「この間で、泣くようなヴァイオリン！」と、わけのわからない私の注文にも拍車がかれば、演奏者のお二人は、摩訶不思議な演奏で芝居を盛り上げてくれるから大したものだ。

そして最後は仕上げとして、稽古場にある緞帳幕付きのステージに上がり、稽古場備え付けの照明を使い、ライティングも施し、さあお待ちかね！「ミニミニ発表会」を各チームに披露してもらうと、読み合わせの時に首をひねりながら行っていた芝居はどこへやら！「不条理劇は任せとけ役者」のように、堂々と噛み合わないセリフのやりとり！その矛盾さが意味を成し、面白い「ゴドーを待ちながら」を完成させることが出来た！！

最初はどのような事かと思ったけれど、さすが何十年間にも渡り全世界で上演されている作品なだけはある。意味不明ながらも、意味不明の中にある意味が私もみんなもちよっぴり理解出来て、ちよっぴり演劇人気取りの出来た実りある演劇教室でした。